



Title	＜紹介＞伊井春樹著『宝塚歌劇から東宝へ 小林一三のアミューズメントセンター』
Author(s)	大西, 萌木
Citation	語文. 2020, 115, p. 79-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

伊井春樹著『宝塚歌劇から東宝へ 小林一三のアミューズメントセンター』

大西 萌 木

本書は、宝塚歌劇創設から東宝設立に至るまでの小林一三の構想の軌跡を、当時の資料を踏まえながら論じ、文化史の中に位置付けるを試みている。以下、目次によってその概要を示す。

- 一 宝塚少女歌劇の初舞台
 - 二 雲井浪子の結婚
 - 三 宝塚少女歌劇の帝国劇場への出演
 - 四 はなやかな少女歌劇団
 - 五 宝塚少女歌劇の編成
 - 六 松竹との競合
 - 七 大劇場の建設
 - 八 新しい演劇への挑戦
 - 九 日比谷アミューズメントセンターの構想
 - 一〇 日比谷の演劇世界
 - 一一 東宝の演劇映画への歩み
 - 一二 演劇世界の拡大
 - 一三 東宝の映画界入り
- 東宝及び小林一三関係年表／参考文献
あとがき

著者が三年前に執筆した『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』（二〇一七年、ミネルヴァ書房）は宝塚少女歌劇の活動を中心としている。本書ではそれだけでなく、その延長線上にある東京宝塚劇場の設立、そして映画演劇の東宝の誕生へと至る小林の一連の構想を、豊富な資料とともに概観することが出来る。

また、描写は劇的な効果を狙うものではなく、事実には忠実に基づき淡々と書き進められている。だからこそ小林の思い描く演劇、映画の形が徐々に市民権を得ていく過程を追体験しているような臨場感が備わっている。適宜付されている当時の新聞記事を参照することで、同時代の状況への理解も深まる。

本書ではタイトル通り宝塚や東宝が中心となっているが、それらの施設のライバル的存在であった松竹の戦略も鮮やかに描き出されている。両者は同じ分野の大きな規模の会社であるだけでなく、劇というものに対する捉え方の違いが根本にあると著者は主張する。今まで培われてきた伝統を重んじる松竹に対し、小林は大衆に向けたより容易で安価な劇を浸透させようとする。同時代の演劇界では小林の考え方は批判にさらされることも多かったであろうが、この一貫した思想が宝塚少女歌劇や東宝の成功に結びついたと言える。

（ぺりかん社、二〇一九年一月、二二八頁、二、五〇〇円＋税）

（おおにし・もえぎ 本学大学院博士前期課程）